

学位論文内容の要旨

		要 旨
学位申請者	山岸 裕美子 【比較社会文化学専攻 平成23年度生】	
論文題目	武家服飾変遷史序説－鎌倉時代から室町時代へ－	<p>服飾は、それを着用する者の心意や心情や美意識、また身分や地位といった社会的立場などを示すだけでなく、社会の規範や秩序のありかたなども映し出す。歴史上の社会を解明していくときに有力な素材のひとつである。</p> <p>本論文は、鎌倉時代の執権期から室町時代の盛期である義持・義教期までのの時期を対象として、武士が公家に対抗して、また武家社会における秩序としてどのような服飾体系を築いていったのか、その背後にどのような規範や企図があったのかなどの問題に取り組むために、まず解明しておくことが必要ないくつかの重要で基本的な問題に取り組んだものである。</p> <p>第一章では、本来武士が貴族の侍、従者として着用した公家系服飾である狩衣と布衣が取り上げられ、狩衣が武家の成長とともに文事における礼装となったこと、狩衣は有文で五位以上の上級武士が着用するものであったのに対し、布衣は無文で中下級武士の衣服であったことが明らかにされ、狩衣と布衣の異同をめぐって長く続いた混乱に終止符が打たれる。第二章では、同じく公家系服飾である水干が取り上げられ、公家が遊興の際や軽装として水干を用いたのに対して、武士は公家に対してことさらに武威を強調する機会にこれを着用したことが述べられる。第三章では直垂が武家の服飾として確立したこと、直垂との組み合わせにおける立烏帽子と折烏帽子の使い分けが解明され、武士たちは親王将軍にも武門の棟梁として行事の際には直垂の着用を求めたとされる。第四章では、白直垂が取り上げられ、これを普通の色物の直垂（染直垂）より上位の服飾とする故実書の説明を退け、さまざまな場面において上位者を引き立てるための服飾であったと結論される。第五章では、武家の服飾であった直垂が室町盛期には公家の世界に進出し、室町殿に家礼として仕えた上級貴族らによって着用されたこと、この逆転現象は中世服飾史上の大転換と評価できることなどが論じられる。</p> <p>本論文の特徴のひとつは、一次史料である日記類の記述から立論したことにある。故実書の説明に寄りかかることなく、直接生の史料を用いたことによって豊かな成果が得られることになった。</p>
審査委員	(主査) 教授 安田 次郎	
	教授 古瀬 奈津子	
	教授 新井 由紀夫	
	教授 浅田 徹	
	教授 宮内 貴久	